【2025年冬休み集中講座のハイライト回顧】
USR計画実践伝統農法：霧台焼畑文化の継承と更なる発展
文字、画像／国立中山大学霧台USR計画チーム
編集／王靖鳳 アシスタント

【はじめに】
2025年1月、「食糧・農業と社会」に関する冬休み集中講座が、屏東県霧台郷で正式に開講されました。この講座は、国立中山大学西湾学院のUSR計画「NATIVE博物館として－原住民社会における自然・文化の共生を学ぶサステナビリティ・プログラム」の一環として実施されたものです。中山大学の教員および学生チーム約20名が参加し、日本からは高知大学の赤池慎吾准教授を招へい。さらに霧台トライブの長老や地元の農家とも協力し、文化学習と土地に根ざした実践を通じて、より深い対話が行われました。講座では、現地調査やフィールドワーク、伝統的な農法の学習が中心となり、異文化および世代間の交流を通じて、山間部での焼畑農業の知恵に対する理解と敬意を深めていきます。最終的には、文化と環境が共生するあり方の実現を目指します。

【活動背景と目的】
気候変動の加速や土地利用の変化が進む中、伝統農法に宿る生態学的な知恵や文化的価値が、いっそう注目されるようになっています。本講座では、学生がルカイ族の「焼畑農業」に関する知識体系や生活文化を、実地で体験しながら深く理解し、それらの伝統的知恵を、現代社会で活かせる具体的な行動スタイルへとつなげていく方法を探ります。講座は、学術的な探究と現場での実践の両立を重視しており、トライブの長老が直接に学生を指導できるようにしました。環境の観察、文化の探求、田畑での作業などさまざまな体験が行なわています。こうした交流や地域とのふれあいを通じて、学生が「知識とは実践を通じて深まるものだ」という考え方を実感できることが期待されています。

【活動日程と主な内容】
■ 初日：活動の説明会（1月13日、月曜日）
学生が現地のコミュニティ（トライブ）に入る前に、基礎的な知識と文化的感受性を養うことを目的として、事前の導入講座が設けられました。まず、王宏仁先生が霧台エリアの地理的特徴や主な農作物について紹介し、焼畑農法の持続可能性と気候変動政策との関係について解説しました。さらに、社会に一般に存在する焼畑農業に対する誤解についても丁寧に説明しました。講座の最後では、テーマ別によって学生がグループに分かれ、それぞれ「自然環境」、「伐採の過程と分業」、「防火帯の設置」に焦点を当て観察し、後のフィールドワーク向けに準備しました。
また、ルカイ族の環境倫理や精神的文化を深く理解し、尊重するために、霧台郷百合サステナビリティ発展協会理事長の盧志良氏を講師として招き、ルカイ族の価値観や信仰について学ぶ時間も設けられました。彼は、頭飾りや建築、アワ（小米）にまつわる信仰や神話を例に挙げながら、ルカイ族が儀

式や禁忌を通じて自然との調和をどのように保っているかを紹介しました。特に、クマタカやヒャッポダといった動物の象徴的意味や神聖性、それに伴う保護の規範についても説明がありました。全体を通してこの導入講座は、自然資源の持続的な利用と、山や森のあらゆる存在に対する畏敬の念を抱くことを強調し、学生がルカイ族の伝統的な規範を尊重しながらトライブに入り、トライブの環境と文化の共生を重視する精神を実践することをすすめています。

■ 2日目：谷川トライブの畑での伐採と焼畑（1月14日、火曜日）
2日目の午前、霧台谷川トライブにあるアワ畑に到着した学生たちは、巴清雄先生と霧台部落の包光輝長老の指導のもと、農具の使い方や草木の伐採技術、防火帯の作り方などを学び始めました。まず学生たちは鎌を使い、畑の中の雑草や樹木を一つひとつ丁寧に刈り取り、それらを集めて分類・整理しました。その後、グループごとに火を入れ、焼畑作業を本格的に開始しました。

数日前の雨の影響で土壌はやや湿っており、長老は学生に対して乾いた枝を拾って燃料にするようにと指導しました。また巴先生は現場での素材調達、ゲットウの葉を材料とする簡易消火具の作り方を教え、火が大きくなりすぎて危険を招かないよう配慮しました。長老の丁寧な指導と実践的な活動を通じて、学生たちは伝統農法の実用的な知識と、その背景にある文化的価値を身をもって体験しました。こうした取り組みは、トライブと大学との間で世代を超えた文化交流を促す貴重な機会にもなりました。

夜のグループ報告では、学生たちは当日の実践内容をフィールドノートとプレゼン資料にまとめました。報告には、焼畑地の自然環境の観察結果、農具の使用法、労働における性別分業、伐採時の構え方、防火帯の設置などが含まれていました。この日の学びは、「知識を本から実践へと広げる」という講座の核心的な理念を体現するものであり、学生たちは多様で地域に根ざした知識体系に対して、尊重と理解の姿勢で向き合う方法を身につけました。

■ 3日目：ゲットウ葉の編み細工と霧台トライブの訪問（1月15日、水曜日）
前夜からの雨の影響で、予定されていた畑での焼畑作業は実施できず、当日の講座は雨天時のプログラムに変更されました。午前中は、3人の長老が講師となり、学生に月桃ゲットウの葉を使った編み細工を指導しました。学生たちは断熱コースター作りに取り組み、月桃の葉編みが自然素材と伝統的な手仕事を融合させた技術であることを体験を通じて学びました。月桃は消火用具としての実用性だけでなく、工芸素材としても活用できることから、自然の知識が生活に根ざした形で伝えられていることを実感しました。

作業は、葉の切り取り、葉鞘の乾燥・層の剥離・逆巻き・乾燥、引き伸ばしといった工程を経て、形を整えるところから始まりました。次に、滑らかで傷のない葉鞘を16本選び、縦横それぞれ8本ずつ交差させて編み上げていき

ます。編み作業には繊細さと根気が求められ、偶数本から順に処理して奇数本をまとめる手順で進めます。慣れると自然と手が動くようになり、最後に端を整えると、素朴でありながら精緻な作品が完成しました。

午後になると雨も少し収まり、巴清雄先生の案内で学生たちは霧台トライブを訪れ、地域に生息する一般的・固有の動植物について学びました。生物科学を専攻する学生たちは専門知識を活かしながら、仲間と共にツルヒヨドリ、ヒマワリヒヨドリ、オオバギ、タイワンオオバッタなどの植物や昆虫を識別し、さらには珍しいハリガネムシも見つけました。先生は観察をより深めるために、鳥類識別アプリ「Merlin」や自然観察アプリ「iNaturalist（愛自然）」「PictureThis」などのデジタルツールの使い方を教え、学生たちの活動をサポートしました。

【講座の感想と検討】
霧台集落での焼畑実習を通じて、学生たちは実際の作業を体験しながら、伝統農法に宿る知識と文化的価値を深く理解することができました。鎌で草を刈り、電動ノコギリで伐採を行い、防火帯を整備し、現地で材料を調達してたいまつや消火用具を作るといった一連のプロセスは、挑戦に満ち、新鮮な驚きの連続でした。こうした体験を通じて、学生は集落の長老たちが代々受け継いできた知恵の深さに触れることができました。多くの学生は、焼畑農法に対して「原始的」「時代遅れ」といった先入観を持っていましたが、実際に体験して初めて、その背後にある環境的な合理性や持続可能性の意義を理解しました。たとえば、火によって土壌を再生させたり、地形を活かして火の広がりを調整したり、現地の資源を循環的に活用したりする工夫などが挙げられます。

2日目に行われたゲットウの葉編みの講座では、学生は手作業を通じて、自然資源をさまざまなかたちで生活に取り入れる集落の知恵を学びました。また、この工芸には女性の労働や伝統的な役割分担が深く関わっていることを実感し、文化的な重みを体験する機会となりました。夜のグループ報告では、台湾と日本の学生が多言語で協力し合いながら、長老へのインタビューや実習の記録を整理しました。この過程を通じて、学生たちはチームワークを育みながら、原住民族文化、性別による役割分担、土地に対する倫理観といったテーマについて、より深く考えるきっかけを得ることができました。

【未来への展望】
多くの学生は感想の中で、今後も先住民族の集落に深く関わりながら、実践と対話を組み合わせた講座が継続されることを希望していました。こうした講座の形式は、書籍からは得られない知識を補完するだけでなく、台湾の先住民族、伝統農業、環境の持続可能性、そして文化の継承に対する関心や責任感を育む契機になっていると学生たちは認識しています。

また、長老との対話を通じて、「地位が貢献に繋がる」という集落の倫理観への理解が深まり、都市生活の中で自然との関わりが失われていることに対する省察のきっかけにもなりました。将来的には、狩猟文化、生態系モニタリング、原住民族の言語記録など、さまざまな学習テーマへと発展させ、学際的かつ異文化的な視点から知識を共に創り出していくことにより、原住民族の知恵が現代社会において可視化され、実践されていくことを学生たちは願っています。

【おわりに】

2024 年、中山大学は霧台で初めて焼畑講座を実施し、地域では約 30 年ぶりに伝統的な焼畑農法が復活しました。今年は第 2 回目となる焼畑実践講座が開催され、学生たちは伝統的な農法を体験するだけでなく、行動を通じた学びと悟りを通して、集落との真摯な関係構築を目指しています。さらに、5 月下旬には再び霧台を訪れ、焼畑のあとに播いたアワの収穫を行う予定です。午後、燃え残りの火が徐々に煙へと変わり、田畑が焦げたような静けさに包まれています。このような景色を視野に、学生と長老たちは心の中には、「知識」「文化」「土地の記憶」を守り伝えようとする意志が炎のように燃え続けています。

【活動写真】

01.13 USR チームの教員と学生、長老との集合写真

01.13 包光輝長老が学生に木を切る構え方を教える

01.13 巴清雄先生が学生に現地素材の調達を教え、バナナの葉を使って消火器を作る

01.13 学生ががんばって燃料としての木を切る

01.13 長老が学生に火を他の木に移す方法を教える

01.13 燃え盛る炎は土地に命をもたらしたことで、今年のアワ豊作が期待できる

01.13 学生がグループで夜間報告を行い、日中の観察データをまとめる

01.13 包光輝長老が学生を自宅に招待する